

京に静かに響く音
 ——道成寺の鐘、南蛮寺の鐘にまつわる交流と再生——

The Bells that Quietly “Resound” in the Capital:
 Regenerations and Exchanges involving the Bells of Dojoji Temple
 and Nanbanji Temple

西岡 亜紀*

Abstract

This paper deals with the regeneration and exchange of two bells which exist today in Kyoto: the Dojoji Bell at the Myomanji Temple, and the Nanbanji Bell at the Myoshinji Temple. The Dojoji Bell was forged at the ancient Dojoji Temple in Wakayama. Having passed through its unique destiny, it currently stays at the Myomanji Temple in Iwakura. The “Anchin and Kiyohime incident” is a story involving the Dojoji Bell, destroyed in a fire in the tenth century. Meanwhile, the Nanbanji Bell was forged to serve as the bell of “Kyoto’s Nanbanji Temple” (its official name was the Assumption of Mary Church). The bell was made by Jesuits who promulgated Catholicism in Japan during the reign of Oda Nobunaga in the sixteenth century. After the disappearance of Kyoto’s Nanbanji Temple, the bell was moved from place to place until it found its current home in the Shunkoin within the Myoshinji Temple complex. While each of these two bells followed their own particular fates, destiny determined that they would end up in the same Shijo Horikawa district of Kyoto. The bells

* 立命館大学文学部准教授

are also linked with narrative tales, and with the spirit of medicine and welfare. Their persistence and their continued tolling has been enabled by the spirit of tolerance in Kyoto – its people’s protective reverence for the land, religion, and holy objects which transcended religious sectarianism.

はじめに

寺の多い京都の町では、明け方や夕暮れ時にどこからともなく聞こえてくる鐘の音が、日常の風物の一つである。鐘をめぐる物語も町の至るところにあるだろうが、ここでは、ともに数奇な運命を経て京都に残った二つの鐘にまつわる交流と再生の話を紹介する。

一つは道成寺という仏教寺院の鐘。もともとは和歌山の701年創建の古刹道成寺¹⁾にあったが、縁あって現在は京都市左京区岩倉の仏教寺院妙満寺にある。以下、これを〈道成寺の鐘〉と記す。もう一つは南蛮寺というキリスト教寺院の鐘。もともとこの鐘があった〈都の南蛮寺〉は、16世紀の織田信長の時代に、宣教に訪れたカトリックの宗派イエズス会(耶蘇会)が作ったカトリック寺院であった。その〈都の南蛮寺〉は豊臣秀吉の命で1580年代に破壊されたが、聖堂にあった鐘はいくつかの寺を流転して残された。現在、右京区花園の仏教寺院妙心寺・春光院に保管されている。以下、これを〈南蛮寺の鐘〉と記す。かつてはそれぞれ、寺院の梵鐘として鳴らすものであったが、他の寺に移ってからは音を鳴らすことなくひっそりと伝えられていたものである。

道成寺の鐘 ～物語をつなぐ

道成寺は、和歌山県日高郡日高町にある古刹の仏教寺院である。〈道成寺の鐘〉はこの寺の梵鐘として作られた。数奇な運命を辿って、現在は左京区

岩倉の仏教寺院妙満寺にある。

〈道成寺の鐘〉と言えば、火事で焼失した鐘にまつわる安珍清姫伝説を語る寺伝の『道成寺縁起絵巻』の絵解きや、その安珍清姫伝説から派生して多様な文芸に展開した物語のモチーフとしてよく知られている。絵解き、能楽、歌舞伎、文楽（人形浄瑠璃）、長唄、てまり唄、在地伝承、近代には戯曲や小説と、文芸のジャンルによって異なる脚色を加えた多数の〈道成寺の物語〉が存在している²⁾。

京都は14世紀以降、そうした〈道成寺の物語〉の交流や再生の場として、大きな役割を果たしてきた。能楽『鐘巻』『道成寺』や歌舞伎の『京鹿子娘道成寺』などを生み出した土地であり、その演者を育て演技の場を与えた土地でもある。そしてそれは現在も続き、河原町南座、複数の能楽堂、太秦の撮影所など、〈道成寺の物語〉の創作や演舞の場として、物語の再創造や演者の育成・交流のための空間として〈道成寺の物語〉を過去から未来につないでいる。

1) 〈道成寺の鐘〉：初代の鐘と二代目の鐘

そもそも道成寺の物語の素材となった〈道成寺の鐘〉はどういった歴史を辿っているのだろうか。『古寺巡礼 道成寺の仏たちと「縁起絵巻」』のなかの「道成寺年表」を参照しながら、以下に簡単に整理しておこう。

道成寺の創建は701年。文武天皇の勅願による寺として興った³⁾。静かに歴史を刻む由緒正しい寺の性質を一変させる事件が起こったのは、928年のことである。「道成寺年表」には「〈寺伝〉安珍と清姫の事件で釣鐘を焼かれる」と記載される⁴⁾。女に追われて道成寺に逃げ込んできた旅の若い僧を釣鐘のなかにかくまったところ、その釣鐘ごと女に焼かれたという出来事である。初代の鐘はこのとき焼失している⁵⁾。

それから100年以上経った1040年のところに「『大日本法華験記』、安珍清姫伝説の原型となる話を記す」という記載がある⁶⁾。『大日本法華験記』（本

説話のタイトル表記にはヴァリエーションがあるが本稿では「道成寺年表」の記載に準拠する、以下同様)という法華経の説話集に、説話としての安珍清姫伝説の原型が記されたということである。この説話の概要は次の通り。修業のために高野山を目指していた僧が旅の宿を求めた家の女に懸想される。僧は修業を終えたら再び立ち寄ると約束して去るが、女がいくら待てども僧は現れない。女は執心から蛇に変化し、僧を追う。男は逃げる。道成寺に逃げ込んで寺の釣鐘にかくまわれた男を、追ってきた女(蛇)が釣鐘に巻きついて焼き殺す。後日、互いに絡みついて成仏できずにいる2匹の蛇が寺の僧の夢枕に立つ。僧が法華経を唱えたところ、その功德によって2匹の蛇は昇天する。焼失した初代の鐘をめぐる男女の愛憎劇をモチーフにしつつ、全体としては法華経の功德を説く物語である⁷⁾。

さらに時をくだって、戦乱に明け暮れる南北朝時代の1359年、「二代目釣鐘を鑄造」と記載がある。それに少し遅れて1379年のところには「『道成寺縁起』作成」「このころ、能楽『鐘巻』、『道成寺』初演」と併記されている⁸⁾。この経緯から、道成寺での「二代目釣鐘」という新しい鐘の鑄造をきっかけに、『道成寺縁起』や能楽『鐘巻』『道成寺』といった、今日まで伝承される〈道成寺の物語〉が動き始めたということが確認できる。そしてそれ以降、現在まで600年以上、〈道成寺の物語〉は、安珍という一人の旅の僧に恋い焦がれた清姫という女の妄執の悲劇を共有して、媒体や演者を変えて実に多様なヴァリエーションを持ちながら、再創造を繰り返している。

多様に展開した〈道成寺の物語〉はさまざまな観点から分類することができるが、ここでは、本稿の主要な関心である鐘に着目して、2つの系譜に分類してみる。初代の鐘の系譜と二代目の鐘の系譜である。なお、「道成寺年表」の1379年に併記される『道成寺縁起』と、能楽の『鐘巻』『道成寺』は、それぞれの系譜の出発点と捉えることができるものである。

2) 初代の鐘の系譜：『道成寺縁起』など

『道成寺縁起』というのは、そもそも道成寺という寺の縁起（起源や由来）を書き起こしたものである。道成寺ではこの縁起を『道成寺縁起絵巻』という絵巻物でも残し、絵巻を用いた院主（住職）の絵解き説経という形で代々伝承してきた。この絵巻で物語の重要なモチーフとなるのは初代の鐘であり、大筋としては『大日本法華験記』に語られる初代の鐘に起こった安珍と清姫の事件を取り込んでいる⁹⁾。鐘のなかに入るのは男で、事件の起こった当時（10世紀）の寺が舞台。概要は、次の通りである。

高野山を目指す若い旅の修行僧安珍に、一夜の旅の宿を貸した庄屋の娘清姫が一目ぼれしてしまう。清姫のあまりに強い恋心を断ち切れなかった安珍は、修業の帰路に再び立ち寄ることを約束して去る。しかしその後、待てど暮らせど安珍は現れず、待ちきれない清姫は、彼を探しに熊野街道を走る。やがて、逢瀬の約束を違えられたことを知った清姫。徐々に狂気の形相をまとい衣服を乱しつつ男を追う。途中で安珍に追いつくも「人違いでは」とごまかされたことでついに逆上、蛇体に変化して日高川を渡り、道成寺の鐘に身を隠した安珍に再び追いつく。蛇身の清姫は鐘に巻き付き、鐘ごと安珍もろとも焼き尽くす。そして、その後自らも日高川に身を投じる。ある夜、住職の夢枕に2匹の蛇となり互いに絡まって苦しむ蛇道に落ちた安珍と清姫が立つ。法華経供養が営まれると、両者は天人の姿で現れ、実は熊野権現と観音菩薩の化身であったことが明かされる。

このように、初代の鐘にまつわる『道成寺縁起絵巻』は、『大日本法華験記』に伝えられる「安珍と清姫の事件」の悲劇を取り込みつつ法華経の功德を説く物語である。初代の鐘に起こった出来事のでんまつを語っている。この初代の鐘の系譜には、たとえば人形浄瑠璃『日高川入相花王』や「とんとんお寺の道成寺～」で始まる和歌山のでまり唄などがある。また、プロットは異なるが、浄瑠璃『道成寺現在蛇鱗』も初代の鐘をモチーフにしたものと言えよう。近世以降は、法華経との関連は薄められた物語もあるが、初代の

鐘の系譜は今日まで伝えられている。

3) 二代目の鐘の系譜：能楽『鐘巻』『道成寺』など

上記のように、初代の鐘の系譜では、『大日本法華験記』に語られる安珍と清姫の事件そのものが中心となるのに対し、能楽『鐘巻』『道成寺』では、その事件の後日譚が中心となる。そこでは、初代の鐘が焼失したのちに14世紀に再建された道成寺の二代目の鐘をモチーフにした物語が展開する。この系譜の物語では、鐘のなかに入るのは女で、舞台は二代目の鐘の再建の供養当時（14世紀）の寺。たとえば能楽『道成寺』の概要は、次の通りである。

道成寺で再建した釣鐘の供養が行われることになった日に、一人の白拍子が奉納舞を取めたいと現れる。女は寺男に頼み込み、奉納舞ということで女人禁制の寺に入ることを特別に許される。白拍子は舞いながら鐘に近づいたかと思うと、鐘を落としてその中に入ってしまう。動かぬ鐘を前に寺の住職は、道成寺で過去に起こった安珍と清姫の悲劇を語り始める（初代の鐘の物語はここで語られる悲劇の素材となる）。やがて僧侶たちの一心不乱の読経の甲斐あって、鐘を引き上げることはできたが、そのなかから現れたのは蛇体に変化して般若の面をつけた白拍子。しばらく僧侶たちと格闘をしたのち、蛇は自らの炎でわが身を燃やししながら、日高川へと消えていく。

京都の妙満寺で保管している〈道成寺の鐘〉はこの白拍子の後日譚のモチーフとなる二代目の鐘と言われている¹⁰⁾。京都は、とくにこの二代目の鐘の系譜との関わりが深い。京都で初演を迎えた能楽『鐘巻』『道成寺』や歌舞伎『京鹿子娘道成寺』などは、この白拍子の物語の系譜である。これらは、14世紀以降、京都観世会館、金剛能楽堂を始めとする能楽堂や、歌舞伎を中心に多くの伝統芸能の舞台となる河原町南座で、数え切れないほど演じられてきた。舞う、奏でる、語る、歌う、聴く、観る、泣く。〈道成寺の物語〉は、聴衆の実人生の多様なドラマと響き合いながら、愛憎や怨念や未練を織り交ぜ、京の町で長い年月繰り返し演じられ、今も受容されている。たとえ

ば堤邦彦はこうした物語を「蛇身の女の物語」¹¹⁾とまとめ、それを受容する聴衆の心性について「近世民衆史のなかの女たちは、鱗の生えた清姫の業障をみづからの実人生に重ね合わせ、平凡だが朗らかな浮世の暮らしを破滅に向かわせてしまう妬毒と愛欲の炎に眉を顰めながら、それでいて邪恋の行く末に好奇の目をみはり、対岸の愛憎幻想を十分に堪能する」¹²⁾と分析している。つまり、清姫を反面教師とする自戒と、自分には起こりえない／起こってはならない出来事の末路への好奇との両義性に身を委ねながら、近世の女性たちは物語を享受した。一人の女の悲恋を、場所や媒体を変え演者を変えながら再生することで、聴衆の実人生の叶わぬ思いや叶えてやれなかった思いを、舞台という虚構の空間で交流させ昇華したとも言えるだろう。

こうして600年もの長い時間、〈道成寺の物語〉が京都の随所で再創造され人々の思いを交流させる間、〈道成寺の鐘〉はひっそりと京の地に在った。戦前までは寺町二条で、戦後の移転のあとは岩倉の地で、継続して妙満寺で大切に保管されていたのである。この先も〈道成寺の物語〉が再生を続ける限り、その鳴らぬ鐘の音は京に静かに響くはずである。

〈南蛮寺の鐘〉 ～西洋医療と福祉の精神をつなぐ

ここまでは仏教寺院の鐘の話。ここからは、もう一つの、キリスト教寺院の鐘の話に移ろう。『道成寺縁起』が作成され、能楽『鐘巻』『道成寺』などの初演が行われた14世紀からさらにくだった室町後期、1500年代終わり頃に作られた〈南蛮寺の鐘〉である。二代目の〈道成寺の鐘〉が安土桃山時代の戦乱を経て京都に持ち込まれ、当時寺町二条にあった妙満寺に奉納されたのが1588年¹³⁾のことなので、折しも二代目の〈道成寺の鐘〉が京都に着いたのと同時期の話である。

戦乱に明け暮れていた1500年代後半、室町時代から安土桃山時代にかけては、カトリック教会が日本に最初に接近した時期でもあった。移り行く政

権と為政者の意向に翻弄されて、〈南蛮寺の鐘〉は、そこに関わっていた宣教師たちの苦難の運命に飲み込まれていくことになる。しかし、そうした運命のなかでも、一口のキリスト教寺院の梵鐘が京を出て各地を巡って再び京の地に戻り、現在も花園の妙心寺に残っている。

1) 〈都の南蛮寺〉(被昇天の聖母教会)：イエズス会の教会

〈都の南蛮寺〉(正式名称「被昇天の聖母教会」)が京都に建てられたのは、1576年のことと言われている。カトリック、イエズス会の教会である。現在の地名表記で言えば、中京区蛸薬師通室町西入ル姥柳町のあたりである¹⁴⁾。この教会の建立の経緯については、医療の歴史との関係から記されたいくつかの資料に詳しいが¹⁵⁾、以下の杉立義一『京の医史跡探訪』における説明が最もわかりやすいので、引用しておく。

永禄三年(一五六〇)、室町幕府から許可をうけヴィレラにより正式に京都で布教がはじめられた。数々の迫害にあいながらヴィレラは、ようやく姥柳町で一軒の家を買い求めて、そのなかに礼拝堂を設けた。信長の庇護のもとに礼拝堂を新築することになり、フロイスとオルガンチーノ〔原文ママ〕は信者の協力をえて工事を完成させて、天正四年(一五七六)七月十六日に献堂式のミサが行われた¹⁶⁾。

この説明から、京都で小さな一軒家から始まったイエズス会の布教が、十数年を経て信長の庇護を得て、ついに礼拝堂を新築するに至った、それが完成したものが〈都の南蛮寺〉と呼ばれるものということが確認できる。第213回京都市考古資料館文化財講座で山本雅和が行った報告「織田信長と京都」の資料では「イエズス会宣教師オルガンチーノが信長の信任を受けて、キリシタン武将として有名な高山右近らの協力を得て天正4年(1576)に建立したもの」¹⁷⁾とまとめられている。また、同講座資料のなかで「『洛中洛外

名所図扇面』には鐘楼を備えた3階建ての建物が描かれている」ことも言及されており¹⁸⁾、さらに掲載の再現地図からは1576年当時には本能寺と隣合せに位置していたことも確認できる¹⁹⁾。

その後、織田信長が1582年の「本能寺の変」で明智光秀の謀反によって死亡したのちは、周知のように豊臣秀吉の治世となった。最初のうちはキリスト教を容認していた秀吉だったが次第に方針が変わり、1587年には「伴天連追放令」を發布する。そのタイミングで〈都の南蛮寺〉は破壊された。妙心寺・春光院に安置されている〈南蛮寺の鐘〉は、鐘に刻印されているイエズス会の紋章と1577年の紀年銘とを照合して、この破壊された〈都の南蛮寺〉の鐘とするのが通説であるが²⁰⁾、当時の日本には南蛮寺は京都だけでも数か所あったことから、必ずしもこの〈都の南蛮寺〉に特定できないとする見方もある²¹⁾。

ただいずれにせよ、安土桃山時代に日本にあったイエズス会のカトリック教会の鐘が、400年余の時を経て現在まで、仏教寺院に残されていることには違いはない。杉野栄が『京のキリシタン史跡を巡る』のなかに書いている妙心寺・春光院での聞き取りには次のようにまとめられる。この鐘は、春光院には1854年頃に仁和寺から送られてきたもので「朝鮮伝来の鐘」と伝えられていたという。太平洋戦争中の金属類回収令の要請の際に当時の住職は、寺と直接関係のないこの朝鮮伝来の鐘を供出しようかと一時は考えたものの、しかし「銘の刻まれている由緒のある鐘は、朝鮮伝来のものではなくじつは初期のキリスト教布教のために送られてきた大切な信仰の証である」「クリスチャンのためになんとか残さなければならない」と考えて、地中に埋めて守ったということである。代わりに寺の大切な備品の一つを差し出したことで現在でもそれが欠けている、という当時の住職の英断が寺伝として伝えられているという²²⁾。この逸話に見られるような、異教や異民族に対して寛容な日本の仏教寺院の姿勢は、近代以降の西洋医療の再生の場面でも見られるものである。それについての詳細は、本章の3節で触れる。

2) 秀吉が認可した南蛮寺（諸天使の元后教会）：フランシスコ会の教会

1587年に「伴天連追放令」を出した豊臣秀吉だったが、その後まもなくキリスト教に対する態度を一変して友好的になり、イエズス会のあとに来日したフランシスコ会の宣教師たちに京都に土地を与え、教会等の建設を許す。このときに建てられた南蛮寺や宣教師の活動についての詳細は、いくつかの文献に確認できるが、川端眞一が医史との関係からこの点について簡明にまとめているので、以下に引用する。

秀吉も最初は宣教師たちに好意を示し、スペイン系フランシスコ会のペトロ・バプチスタ（?～一五九七）に現在の京都市下京区綾小路堀川西入ルの妙満寺跡地に土地を与えた。バプチスタは、ここに聖マリア教会を建てた。

先にやって来たイエズス会が上層階級を布教の対象にしたのに対して、フランシスコ会は庶民の救済をめざした。このため、貧民救済を目的に五十人を収容できる聖アンナ病院が建てられ、院長のレオ烏丸夫妻たちがハンセン病患者たちの世話にあたった。やがて、この病院が手狭になると、今度は八十人ほど収容できる聖ヨセフ病院が建てられ、パウロ鈴木院長らが献身的に働いたという。この両病院が京都における最初の洋式病院であった²³⁾。

西洋医療は既に、上述のイエズス会の医師免許を持つ宣教師を中心に、京都を含めたいくつかの土地で着手されていたが²⁴⁾、このフランシスコ会が建てた南蛮寺では、聖アンナ病院と聖ヨセフ病院という「京都における最初の洋式病院」を建てて、組織的な西洋医療に取り組んだことが確認できる。ここではとくに、まだ当時の日本では発達途上であった「貧民救済を目的」「ハンセン病患者たちの世話」といった救貧や福祉に組織的に着手したという点が、医療福祉の発展において画期的なことであったと言えるだろう。

しかし、そうした宣教師の試みはその後まもなく打ち切られる。秀吉のキリシタン弾圧が再び始まったのである。南蛮寺で医療活動にあっていた人々は後に1597年の「二十六聖人殉教」と呼ばれる過酷なキリシタン弾圧の対象になる。聖アンナ病院長のレオ烏丸や聖ヨセフ病院長のパウロ鈴木、ペトロ・バプチスタを含め、病院で医療行為にあっていたフランシスコ会とイエズス会の宣教師や医師らを含む計24名のキリシタンが捉えられ、京都市中引き回しのうえ一条戻橋で左耳をそがれて長崎まで送られたのちに、西坂の丘で処刑される。フランシスコ会を中心とするカトリックの献身的な医療行為によって京都の町に広がりつつあった西洋医療や医療福祉の輪は、こうして無残に断ち切られた。そして、彼らが撒いた種が芽吹くまで、その後300年を待たねばならなくなった。こうした史実から、現在の岩上通りと綾小路通りの交差点には「妙満寺跡 二十六聖人発祥之地」の石碑が建てられている。また堀川通りの四条病院跡地で現在ホテルになっているところには、聖人の名前を記した碑文を刻んだ板が取り付けられている。

ここで着目しておきたいのが「妙満寺跡」という記載である。秀吉がフランシスコ会の宣教師たちに与え、「二十六聖人発祥の地」となった彼の地は、上述の〈道成寺の鐘〉に縁のある妙満寺が寺町二条に移る前にあった場所だったというのは、奇妙な偶然である。妙満寺の公式HPによると、1500年代半ばの妙満寺は、戦乱のなかでたびたび消失の憂き目に遭い、移動を重ねていたようである。度重なる移転を経て一旦はもともとの居住地であった上記の四条堀川に落ち着いていたが、1583年に秀吉に命じられて寺町二条（現京都市上京区榎木町）に移転する。妙満寺はその後、1968年に現在の岩倉の地に移転するまでの400年近くの間は寺町二条にあったわけだが、その寺町二条にあった妙満寺に、1588年に〈道成寺の鐘〉が奉納されたというわけである。混乱の時代のなかでの、二つの鐘にまつわる不思議な土地の巡り合わせとして書き添えておく。

3) 京都近代の医療：市民主導の救貧医療

南蛮寺で始まった西洋医療や福祉は、江戸時代に入って一層激化するキリストン弾圧の波を経て鎖国の時代を迎え、実質的に300年間中断する。もちろん、長崎においては蘭学として西洋医学を学ぶ場は残ることになるので、一部で技術としての蘭学は学ばれていくが、京都の南蛮寺に置かれたような西洋式病院の設立や救貧を目的とした病院の設立といった組織的な医療やそれと連動する救貧医療は、本格的には芽吹かなかった。

しかし、近代に入って、再び西洋との交流が始まりキリスト教の再宣教も許されたときに、京都の町に次々と、西洋医療や救貧の種が芽吹いていく。『京都の医学史』によると「京都府は産業・教育だけでなく、医療でも先進的な施策を行ったが、これらはほとんど民間の協力・資金により創立されたもので、種痘の有信堂、^{くぼ}驅黴の「療病館」、南禅寺の「^{てん}癲狂院」などは民間の始めたものである。療病院すら民間医師の熱心な建言と、市民ことに^{くぼ}寺社・花柳界の資金的協力によって生まれたものであった」²⁵⁾とある。「^{くぼ}驅黴」というのは娼妓の性病検査と治療のことである。「^{てん}癲狂」というのは精神疾患のことなので、いずれも、社会的弱者のための医療に尽くす病院である。ここから、京都では、西洋医療の導入や社会的弱者のための救貧や福祉を目指した病院の設立が、政府主導ではなく市民主導の形で少なからず行われたことが確認できる。そして、市民のなかから内発的に起こる医療改革に、仏教寺院や花柳界が資金援助したという構図があったようだ。

たとえば上の引用で挙げられている3例のうち、仏教寺院との関わりが深い2例について以下に確認しておこう。まずは「療病館」。民間の医師であった明石博高(1839-1910)は、外国人教師招聘による洋式病院と医学校の開設を構想し、府に度々建議しては却下されていた。あるとき、仏教寺院からの寄付を着想し、その構想を進めたところ、永観堂、金閣寺、銀閣寺を始めとする主だった寺の住職25人から寄付が集まった。最終的には67人もの住職が協力したという²⁶⁾。仏教寺院の支援が推進力となって明石の建議する

「療病院」の設立・運営に見通しをたてた京都府は、1871年に河原町二条に創立事務所を設立し、明石はそこに所属する医師として準備に奔走した。組織の編成やシステムの設立を進める一方で、翌1872年にドイツ人講師ヨンケル（1828-不明）を迎えて、医学教育のための基盤も整える。そして、1872年に東山区粟田口の青蓮院に、「療医院」が誕生した。ドイツ医学を主体とするもので、民間医師主導の市民の効力に支えられた民間の西洋式病院の誕生である。ここでも青蓮院という仏教寺院が敷地を提供して協力している。この療病院と医学校がのちに1880年、広小路に移転し、当時最高の施設として開院、現在の京都府立医科大学の前身となった²⁷⁾。

近代の京都では、西洋医療の導入のために仏教寺院が協力した例は少ない。もう1例の南禅寺の「癲狂院」もその代表例である。上記の「療病院」設立を推進した明石は、1875年に、京都府と永観堂の前任職の協力のもと、南禅寺方丈に「癲狂院」を設置する。これが日本初の公立精神病院と言われている²⁸⁾。その後、1882年にこの病院は一旦廃止されるが同年に永観堂内に私立京都癲狂院が開設され、その後、土地を移して、川越病院と改称して現在に到る。これらの例から、京都においては科学技術としての西洋医療の導入はもちろんであるが、それと同等にあるいはそれ以上に救民救貧思想が、市民を巻き込みながら町全体で起こってきたということが確認できる²⁹⁾。

実は、こうした京都の西洋医療や医療福祉の導入における市民の姿勢は、〈道成寺の鐘〉や〈南蛮寺の鐘〉を残した京都の寺院の姿勢と、緩やかに重なるものである。土地を超えて宗教や宗派を超えて鐘を預かり残した背景には、〈聖なるモノ〉を敬い慈しみ守る、そして痛み苦しむ人々のそれらに込めた祈りをつなぐという思想がある。〈南蛮寺の鐘〉を破壊された教会から取り出した町衆がいたこと、巡り巡って流れてきたキリシタンの鐘を仏教寺院で受け入れた住職がいたこと、自らの寺の物品と引き換えにして異教の教会の鐘を残し守ってきた住職がいたこと、そのいずれかが欠けていても鐘

は残っていない。

仏教寺院に奇跡的に残され守られてきた〈南蛮寺の鐘〉の音に響き合うかのように、そしてそれを守り続けている仏教寺院の思いに呼応するかのように、かつてのキリスト教伝来において撒かれていた医療福祉の種が、300年を経た日本に根づき、今日までその精神は活かされている。

〈聖なるモノ〉の交流と再生：京都の包容力と底力

〈道成寺の鐘〉は男女の愛憎、〈南蛮寺の鐘〉はキリシタンの受難と、次元も性質も異なるとはいえ、それぞれ不条理で悲しい歴史を背負っている。また、鐘自体も数奇な運命のなかで、それらが属する宗教や宗派とは異なる寺を流転しながら、今日まで奇跡的に残されてきた。そんな二つの鐘の運命は奇しくも、同じ四条堀川の妙満寺跡地で交差もしていた。

もともと寺では梵鐘であったこれらの鐘は、保管された寺では、梵鐘として屋外に音を響かせることはなかった。そして、〈道成寺の物語〉が600年もの間、何度も媒体や物語を変えて再創造されながら語り継がれてきた時間、16世紀にキリシタンが撒いた西洋医療や福祉の種が300年余り潜伏し近代を迎えて芽吹くまでの時間、寺のなかでひっそりと時を刻み続けてきた。二つの鐘は、梵鐘としては鳴らなかったが、ともに物語や医療福祉の精神と目に見えないものをつなぎながら、京の人々の心に静かに響いてきた。人々の悲しみや苦しみに寄り添いながら京都の町に東西の鐘は静かに響いていたし、これからも響いていくのであろう。

二つの鐘の歴史に見られるように、京都は思想の違いや立場の違いを超えて、他者の〈聖なるモノ〉を敬い、個人の命に向き合う土地であった。それこそが京都の包容力であり、底力であり、「文化」である。その文化の重みと深みがあるならば、京都は今後も多様な国の旅人をおおらかに迎えることができる、聖なる土地であり続けるはずである。

注

- 1) 「道成寺年表」伊東史朗編『古寺巡礼 道成寺の仏たちと「縁起絵巻」』収録（飛鳥園、2014年）の記載によると、1652年以降に現在の天台宗に改宗したようである（93頁）。
- 2) 道成寺公式HPの「道成寺物一覧」（2018年10月更新）では、259作品の「道成寺物」が確認されている。古典芸能も含む舞台演劇では、長い年月同じ演目が伝承され繰り返し公演もされるので、上演回数で数えればより膨大になることは言うまでもない。
- 3) 注1年表、92頁。また、「解説 道成寺の仏像 附 道成寺縁起と安珍清姫像」には、左京区岩倉の妙満寺に残る梵鐘に「紀伊州日高郡矢田庄／文武天皇勅願道成寺治鑄鐘」という天皇勅願を裏づける印が刻まれていることも確認されている（注1書、64頁）。
- 4) 注1年表、92頁。
- 5) 発掘調査では釣鐘堂が10世紀に火災によって消滅したことが確認されている（『道成寺：発掘調査報告書（川辺町教育委員会）』1980年参照）。
- 6) 注1年表、92頁。
- 7) 「第百廿九 紀伊國牟婁郡悪女」『大日本国法華経験記 校本・索引と研究』和泉書院、1996年、122-124頁を参照。
- 8) すべて注1年表、93頁。
- 9) 伊東泰治「道成寺縁起成立についての一考察」（『国際関係学部紀要』4号、1988年、218-230頁）によれば、法華経の説話では、清姫は屋敷で蛇に変化してから安珍を追いかけるので、追いかけている過程で蛇に変化するという要素は『道成寺縁起』の段階で加わったもので「賢学草子」の物語を合流させたと分析されている。この「賢学草子」は京都の清水を舞台とする男女の愛憎劇なので、実は初代の鐘の系譜にも京都との縁が考察できる。
- 10) 注1年表、93頁参照。
- 11) 堤邦彦「自戒する蛇身——道成寺縁起のゆくえ」『京都精華大学紀要』第30号、2006年、233頁。
- 12) 注11論文、233-234頁。
- 13) 注1年表、93頁。
- 14) 川端眞一『京の医学 慈仁の系譜と府立医大の草創』人文書院、2003年、56頁。これ以外にも、杉立義一『京の医史跡探訪〈増補版〉』（思文閣出版、1991年、266頁）など複数の資料で確認できる。
- 15) とりわけ京都府医師会医学史編纂室編『京都の医学史』（思文閣出版、1980年、182-230頁）が、安土桃山時代の西洋医学の導入と宣教師の関わりについて最も詳細に説明している。
- 16) 注14杉立書、266-267頁。
- 17) 山本雅和「織田信長と京都」（第213回京都市考古資料館文化財講座）、〔財〕京都市

埋没文化財研究所、2010年1月30日、1頁。

- 18) 一般的に「都の南蛮寺図」と呼ばれるもので、現在は、神戸市立博物館蔵である。
- 19) 注17資料、2頁。本能寺は、「本能寺の変」のあとに寺町通の現在地に移転している。資料にも「現在の本能寺は寺町通御池交差点の南東側にありますが、これは天正19年(1591)に秀吉の命令で移転したもの」と記載がある。
- 20) 注14杉立書、268頁。杉野栄『京のキリシタン史跡を巡る 風は都から』(三学出版、2007年、95頁)などにも同様の情報。
- 21) たとえば、注15書の193頁参照。
- 22) 注20杉野書、97-98頁。
- 23) 注14川端書、56頁。
- 24) 複数の文献で言及されるのがルイス=デ=アルメイダの存在である。府内(現在の大分県)に総合病院を開設し、西洋医術を伝来のための日本人医師の指導にもあたったとも言われる。また、堺や京にも滞在しそこに在住する医師に影響を与えたことも知られている(たとえば、注15書の187-190頁ほか、いくつかの文献で確認できる)。
- 25) 注15書、804頁。ルビは本稿の著者が加筆。
- 26) 注14川端書、143頁参照。
- 27) 同、132-157頁参照。
- 28) 同、159-160頁。
- 29) 注15書(805頁)では、「救貧医療(慈善医療)」は明治時代を貫く医療の大きな柱と指摘されている。京都の場合は、そこに市民レベルでの協力があったということが重要な点である。